

令和4(2022)年度 人文学部公開講座

人文学を楽しむ PART 5

第1回 6月4日(土)

「地域企業の連携と新産業創出」

准教授 下畑浩二

人文学部公開講座内に社会科学の内容の講義、つまり、経営学的視点からの講義を実施した。このため、人文学的内容の講義を好む聴講者の中で社会科学的内容でも関心を持って聴講したい方が今回の講義に出席すると考え、人文学部の中のビジネス・社会専攻の存在とその位置付け、経営学とは何か、を理解しやすく簡潔にお話してからのタイトル通りの講義を行った。また、講義内容は、小生の今までの航空機業の研究をベースに、専門知識を持たない一般の方に対して地域企業の取り組みを平易に紹介するものとした。加えて、当日講義開始前に、聴者の方々に対して今回は人文学ではない、社会科学の内容の講義についてどういうイメージを持つか、といった内容で話しかけながら、関心が持続するための「場」を作るように努めた。

講義内容は、次のとおりである。地域内の企業連携による新産業創出を通じた様々な地方創生・地域活性化のための政策フレームワークが行政によって策定・実施された。このことで新産業創出を目指し、航空機製造業など今後の需要を見込んで成長産業と位置づけられた産業へと取り組むケースが昨今多くみられる。このような地域企業連携と新産業創出の流れを踏まえた上で、航空機製造業に焦点を絞り、共同受注体の構築に達した地域の事例で代表的な取り組みと考えられる二つの事例を詳細にみていくこと、そしてそれらのケースから、新産業に参

画する枠組みを形成するためには何が必要となるかが今回の講義の目的であることを提示した。

その上で、航空機製造業の特徴(サプライチェーンの階層化、開発費の高額化を抑制できる企業に発注、受注の特殊性、中小企業の受注方法[工程内、あるいは工程間連携による部品やシステム単位での受注など一貫生産システムの形成])を説明した。そして、地域と中小企業連携のケースとして、(1)飯田下伊那地域とエアロスペース飯田、(2)新潟市とNIIGATA SKY PROJECTを取り上げた。それらのケースから、三つの共通点、そして各地域の新産業創出の経緯から導いた新産業創出の類型を提示し、新産業参画への枠組み形成に必要となるものを見出した。

講義後に質疑応答を受け付けたが、複数の聴講者から質問があり、予定より遅れて講義を終了した。その時の聴講者各自の表情や場の雰囲気から、同テーマの講義は概ね好意的であったと推察できた。

第2回 7月9日(土)

「鎌倉時代の和歌と住吉」

准教授 阿尾あすか

鎌倉時代の住吉大社と和歌の関係、住吉近辺の歌枕を中心に講義を行った。住吉大社はもともと航海の神であったが、和歌の神の役割も果たすようになった。和歌の神とされるようになったのは、平安時代末期から鎌倉時代前期にかけてのことと考えられている。もともと、平安時代の頃から、住吉の神は和歌を詠む神、和歌を好む神として認識されていた。和歌山の玉津島社と並んで和歌の神として住吉社について記すのは、藤原俊成撰の『千載和歌集』仮名序で、神祇歌の配列などからも俊成の住吉社への

信仰がうかがえる。そもそも、住吉社を和歌の神である玉津島社と結びつけて、それに並ぶ和歌の神として定着させたのは、住吉社の神官、津守国基である。国基は院政期に住吉社神官としての家格を確立させた。津守氏は、その後、俊成・定家の血をひく歌道家の二条家と関係を深めることで、歌神としての住吉社の地位を不動のものにしてゆく。

そもそも、住吉という場所は、「すみのえ」と呼ばれる海辺でその景観が和歌に詠まれる名所でもあった。住吉と一緒に詠まれる題材としては、『万葉集』では「粉浜のしじみ」、『古今集』以降では「姫松」「忘れ草」「浅沢小野」などがある。これらは、住吉が海辺の湿地帯、風光明媚な砂岸だったことを表している。歌神としての住吉社の神格化が進むにつれて、住吉は浪や松と取り合わせた神祇歌に詠まれ、その靈験を景観の良さと重ねて称えられることになる。

第3回 9月17日(土)

「隋王朝と遣隋使」

教授 中村圭爾

遣隋使が赴いた隋王朝の当時の事情について、王朝建国の経緯、二代の皇帝の姿、当時の政情や社会の状況を中心に紹介した。

最初の遣隋使は、隋の記録では西暦600年であるが、これは日本側には記録がなく、日本側の記録の最初は、小野妹子派遣の607年のことになる。隋が建国したのは581年、南北分裂を統一したのは589年、この中国の統一が東アジア世界の国際環境に大きな影響をあたえ、最初の遣隋使派遣の一つのきっかけとなったことはよく知られている。

隋を建国した楊堅(初代皇帝文帝)は、モンゴル南部地域の武人出身、威厳があり明敏な人

物であったとされる。最初の遣隋使が、倭王は天が兄、日が弟で、日が昇ると政治は弟に任せたと行って執務を止めるという珍説を弁じて呆れさせたのがこの文帝である。ただ、文帝は、夫人の画策で、皇太子であった長男を廃し、次男楊広を皇太子に立てるという政局の混乱を生じさせ、後に失策であったと後悔する結果となる。この政変が起こったのが600年年末、つまり最初の遣隋使の年である。

この楊広(楊広)が604年、父文帝楊堅に代わって即位(楊広が病臥している父を、人を遣って殺したといわれる)したのが二代目皇帝煬帝である。煬帝は即位直後から、200万人を動員したという洛陽城の建設、それぞれ100余万人を動員したという二大運河の開鑿(605、608年)や、50余万の大軍を率いての北方遠征(607年)などと、矢継ぎ早に民衆や兵士に負担を強いる政策を強行する。死者が相次いだといわれるこれらの政策で、当時の華北地域には大きな混乱と民の怨嗟が広まり、社会は騒然としていた。

第2回目の遣隋使は、607年7月に出発し、翌年6月、唐の使者とともに帰国しているから、華北地帯を通過した遣隋使は行く先々で、この騒然とした華北の世情をつぶさに実見したことかと推察される。求法の熱意と、「日出処天子」「日没処天子」の語のある国書が煬帝の不興を買ったということによく知られるこの回の遣隋使は、その後10年で暗殺されることになる煬帝の姿を、この政情とともにどのような思いで眺めたのであろうか。

第4回 11月26日(土)

「戦後史再考」

教授 長谷川精一

本講座では、日本の戦後史をどのように時期

区分するかという点から検討を始めて、特に1960年代から1970年前後までの時期が、日本の社会にとって、幕末の「第一の開国」に対して「第二の開国」とも呼び得る時期であったと考える立場から、この頃の出来事とその背景に関して、高度経済成長がもたらした「光」の側面と、光化学スモッグに示されるような公害の発生などの「陰」の両面について振り返った。さらに、1964年に開催された東京オリンピックに関して表明された様々な言説、2020年に予定され、コロナ禍により翌年に実施された2度めの東京オリンピックに関する意見、2つのオリンピックについての当該時期のアンケート調査に論及した後、ACジャパンの『ライバルは、1964年』と題するCMを手がかりとして、2つの時期で何が異なるのかを検討した。これらの作業を通して、グローバル化が進み、「第3の開国」とも言い得る現在の日本社会が抱える問題点に関して考察を試みた。

第5回 2月4日(土)

「『涅槃経』を読む：ブッダ最期の物語」

准教授 井上 陽

釈迦の入滅という事象は、実在したブッダ(釈迦)の存在を無化にした。「最後の禪定への入定」と「滅後の舎利の処理と分配」を核とする〈涅槃経〉は、実在したブッダの仏教から、別次元を生きる仏教へどう接続するのが説かれている。実在したブッダの無化は、釈迦が弟子たちに「わたしの滅後は、わたしの説いた法と、わたしの制した律とがおまえたちの師となる」と述べられるように、「抽象的な理念としての教え」と、火葬後に残った舎利をもとに実際に造営された仏塔があらわすような、「具体的な形象としての舎利」に転換され、継承され

ていった。

実在したブッダがこの世から滅したからといって、ブッダの存在そのものが否定されたわけではない。実在したブッダとは異なるかたちでブッダは存在し続けたのである。また、ブッダの特性を示す述語である「涅槃」は、決して絶対的な無を意味するわけではなく、無為法として存在していることをあらわす。

「涅槃」は「海」「陸地」「洲」などに喩えられ、究極的に獲得可能であり、究極的実在であることが説かれる。無になるのは、あくまでも煩惱であり、障礙であり、有為法としての五蘊の存在である。〈涅槃経〉が説くブッダ最期の物語は、次元を異にする究極的なブッダ、永遠なるブッダの存在が説かれているのである。

このようなブッダの存在は、遺跡としての仏塔から発見されている銘文にもあらわれる。シンコット出土凍石製舍利容器銘文では生命を具有するブッダの舎利が述べられ、シルカップ出土金薄板銘文では再生の場としてのブッダの舎利が述べられていることから察することができる。

また、仏塔信仰は、それまで釈迦に限られた「涅槃」を衆生にも開放することにつながった。タキシラ出土銀薄板銘文、ハッダ出土水瓶銘文は、衆生の涅槃の獲得が明言される。衆生が涅槃を獲得できるのは、そこにブッダが存在するからである。

〈涅槃経〉は、釈迦入滅という事象を乗り越えて継承されるブッダの存在と、ブッダに代わる教法の存在を明確に示したのである。また後者は、新たな經典を生み出す要因にもなったのである。

2022年度 相愛大学人文学部 公開講座

人文学を楽しむ Part5

今年度も感染症対策に留意しつつ、開催いたします。テーマは「人文学を楽しむ」。本学の教員がウンチクを傾けます。人文学の広がりとお楽しみください。ご来場を心よりお待ちしております。



[開催日時]

土曜日

14時～16時
(13時40分より受付開始)

2022年 6月4日(土)



准教授 **下畑 浩二**
地域企業の連携と
新産業創出

2022年 7月9日(土)



准教授 **阿尾 あすか**
鎌倉時代の和歌と住吉

2022年 9月17日(土)



教授 **中村 圭爾**
隋王朝の歴史と遣隋使

2022年 11月26日(土)



教授 **長谷川 精一**
戦後史再考

2023年 2月4日(土)



准教授 **井上 陽**
『涅槃経』を読む：
ブッダ最期の物語

開催場所

相愛大学南港学舎

今年より南港学舎です!

Osaka Metroニュートラム「ポートタウン東」駅下車徒歩約5分

定員

各回30名(事前申込制)

※定員になり次第、締め切らせていただきます。

受講料

無料

申込方法

本学ホームページよりお申込みください。

※全5回ご出席の方には最終回に修了証をお渡しいたします。

※講師の都合または新型コロナウイルス感染状況により、開催および内容が変更となる場合がございます。あらかじめ、ご了承ください。

※咳や発熱などの風邪症状、体調がすぐれない方におかれましては、参加をご遠慮ください。

※受講時には、マスク着用、手指消毒にご協力をお願いします。

※授業の妨げになると判断する行為があった場合は、ご退室していただくことがあります。

※お申込み時にご記入いただいた個人情報は、個人情報保護法に則り厳重に保管し、目的以外での使用はいたしません。

お問い合わせ

相愛大学人文学部人文学科合同研究室(平日9時～17時) 〒559-0033 大阪市住之江区南港中4-4-1
TEL: 06-6612-6252 E-mail: jinbungakubu@soai.ac.jp



主催: 相愛大学人文学部 / 後援: 相愛大学総合研究センター

産学連携事業の取り組み（実践活動報告）

～近鉄百貨店あべのハルカス本店 「ハルカス学園祭」に参加して～

【はじめに】

近鉄百貨店あべのハルカス本店が産学連携・地域連携事業として展開している『ハルカス学園祭』に、本年度から、本学も3学部4学科で参加した。この事業は、2021年度から始まった取り組みで、大阪、兵庫、和歌山の約25の大学や学生団体が集結し、自らが開発した商品や授業の中で制作した作品の販売や展示を行うほか、ゼミや部・サークルでの活動など多彩な取り組みを紹介するイベントである。本学発達栄養学科からは、学生達がSDGsの取り組みの一環として、大豆ミート（代替肉）を利用した商品「大豆ミート入り焼きいなり」を出品し、販売した。参加した学生達は、開発した商品を説明するにあたり、お客様とのコミュニケーションも楽しんでいる様子であった。



学部学科紹介のパネル展示



販売ブースの様子



お客様に商品を説明している様子



発達栄養学科2年生

【実施内容概要】

- (1) 開催期間：2022年11月17日（木）～21日（月）
- (2) 開催場所：あべのハルカス近鉄本店 ウィング館9階催会場

(3) 参加大学・団体：相愛大学、大和大学、関西大学、和歌山大学、大阪芸術大学、近畿大学、大阪電気通信大学、兵庫医科大学、大阪工業大学、摂南大学、桃山学院教育大学、大阪経済大学、大阪総合保育大学、四天王寺大学、大阪学院大学、桃山学院大学、大阪夕陽丘学園短期大学、大阪城南女子短期大学、国際ファッション専門職大学、大阪市立デザイン教育研究所、ハルカス大学、大阪ファッションアート専門学校、大阪文化服装学院、大阪動植物海洋専門学校、スチューデントイノベーションカレッジ、清風情報工科学院

【販売商品】

- (1) 商品名：「大豆ミート入り焼きいなり」
- (2) 定価：454円（1セット3個入り、消費税込）
- (3) 協力企業（開発・製造）：株式会社京都庵、



販売した商品



今回の産学連携プロジェクトのロゴ

デリケア株式会社

(4) 商品の内容：材料（キャベツ、油揚げ、持ち、大豆ミート、干し椎茸、にら、昆布、おろししょうが、おろしにんにく、濃口醤油、食塩等）、1個あたりの栄養成分（エネルギー量：90 Kcal、たんぱく質：5.4 g、脂質：5.1 g、炭水化物：7.7 g、食塩相当量：0.5 g）

【おわりに】

学生達がSDGsの取り組みの一環として開発した大豆ミート（代替肉）を利用した商品、「大豆ミート入り焼きいなり」は、開催期間中に100セット300個を完売した。学生達にとって、自分達が開発した商品を来店されたお客様に直接説明し、販売するという実践的な活動ができて、大変貴重な経験となったに違いない。また他大学の学生達の活動状況を知り、お互いに様々な情報交換ができたことも、大変良い刺激になったと感じた。学生達の今後のさらなる飛躍を期待したい。

（文責：発達栄養学科 品川英朗）

(1) 食からSDGsを考える！

人類がこの地球で暮らし続けていくために、2030年までに達成すべき目標

<p>3 すべての人に健康と福祉を</p> <p>食を通して、超高齢化社会における高齢者のたんぱく質エネルギー低栄養(PEM)を改善し、健康寿命の延伸に貢献したい！</p> <p>日本の高齢化率</p>	<p>13 気候変動に具体的な対策を</p> <p>家畜によるメタンガスの総量は、世界の温室効果ガスの約14%を占める。代替肉を利用して、CO2排出削減に貢献したい！</p> <p>世界のCO2排出量</p>	<p>17 パートナリシップで目標を達成しよう</p> <p>SDGsに取り組む食に関連する企業様とタッグを組んで、様々なプロジェクトを推進し、持続可能な商品開発に取り組みたい！</p> <p>産学連携プロジェクト</p>
---	--	---

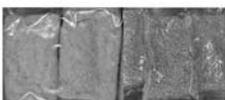
(2) SDGsの取り組み：大豆ミート（代替肉）を利用した商品開発！

第1弾!

「大豆ミート入り焼きいなり」 今回、管理栄養士を目指す私達（発達栄養学科2回生）が考えました！



第1弾の開発メンバー（2回生）



京都庵様からいなりと大豆ミートのご提供

京都庵様
様々なサンプルのご提供、本当にありがとうございました！



デリケア様のご協力でご商品化

デリケア様
私達のアイデアを短期間で商品化していただきまして、本当にありがとうございました！

<開発中の作業工程>



<大豆ミートの利用>

- ①メリット
- ・環境に良い（動物によるCO₂の排出削減）
 - ・植物性たんぱく質が豊富（高齢者のPEM予防）
 - ・食物繊維が豊富
 - ・ビタミン&ミネラルも豊富
 - ・お肉のような食べ心地
- 加工肉を食べるよりは、大豆ミートの加工品の方が安全性は高い
- ②デメリット
- ・入手コストが高い
 - ・遺伝子組み換え大豆使用の場合が多い
 - ・下処理に時間がかかる

<栄養価>

大豆ミート入り焼きいなり（1個あたり）

エネルギー量： 90kcal
たんぱく質： 5.4g
脂質： 5.1g
炭水化物： 7.7g
食塩相当量 0.5g

高齢者でも親しみやすい「いなり」を用いて、植物性・高たんぱく質を実現！

(参考)

- ・豆腐一丁(100g)のたんぱく質量：4.9g
- ・1日あたりのたんぱく質摂取量（推奨量、65歳以上の高齢者）
男性：60g 女性：50g

<美味しい食べ方>

- ・ポン酢と大根おろしで！
- ・お味噌をつけて！
- ・梅肉をのせて！
- ・わさび醤油で！
- ・とろけるチーズをのせて、トースターで！
- ・キムチと一緒に！

<今回の商品開発を終えて>

食を通じてSDGsについて考えてみると、様々な点で貢献できるのではないかと感じた。私達は「大豆ミート」に注目し、商品開発に取り組んだ。代替肉として環境にもやさしく、また高たんぱく質食としてもその実用性は計り知れない。超高齢化社会を迎えた我が国にとって、健康寿命の延伸には、高たんぱく質食の提供が必要不可欠で、今後も継続して商品開発を行いたい。

学生が作製した販売用ポスター



大豆ミート入り焼きいなり (3個入り) 454円

(本体価格420円、1個あたり140円)



具がたっぷり!

- ・大豆ミート
- ・キャベツ
- ・ニラ
- ・お餅
- ・干し椎茸
- ・昆布



揚げにも
豊富な大豆たんぱく質!

環境にやさしい大豆ミートを使った高たんぱく質食!!

この機会に、是非ご賞味下さい!!

◎美味しい食べ方◎

①ポン酢と大根おろしで



②おでんの具として
爪楊枝でしっかり止めて下さい!



③お味噌をつけて



④チーズをのせて



⑤わさび醤油で



⑥梅肉をのせて



商品に関する説明用ポスター

相愛大学研究助成報告

相愛大学研究助成 重点研究 B

人間発達学部発達栄養学科 品川英朗

【研究課題】

嚥下調整食のテクスチャー解析と磁気共鳴画像 (MRI) を用いた in vivo での流動評価

〈はじめに〉

超高齢化社会を迎え、介護に関する問題が非常に多く取りざたされている。特に加齢に伴う摂食・嚥下機能の低下は、食選択にも影響を及ぼし、介護を必要とする高齢者やその家族にとっても、深刻な問題となっている。一人ひとりの摂食・嚥下機能の状態を的確に把握し、適切な食形態や食事量を知ることがより重要になる。本研究の目的は、嚥下調整食やとろみ食の口腔咽頭領域における物性変化や流動特性に関して、MRI 動画記録法を用いて、経時的に評

価することである。具体的には、臨床で広く一般に用いられる X 線嚥下造影検査 (VF: swallowing videofluorography) や嚥下内視鏡検査 (VE: swallowing videoendoscopy) に代わる、非侵襲的で放射線被曝の問題もない MRI を応用し、摂食・嚥下機能の状況を的確に評価できるかを検討した。

〈MRI 動画記録法の撮像条件の検討〉

①画像解像度および画像枚数について最大撮像枚数 (25.6 fps) での撮像を行った。②画像の信号強度 (S/N) を上げるため、鉄 (Fe) を含むパインアップルジュース (パイン 100%、ライフ) に、キシランガム系増粘剤 (つるりんこ、クリニコ) を用いて、1 w/v% および 3 w/v% になるように調合した 2 種類を使用した。③画像撮像の位置およびスライス厚については、矢状断面での位置決めとスライス厚 (1.5 mm) で撮像を試みた。

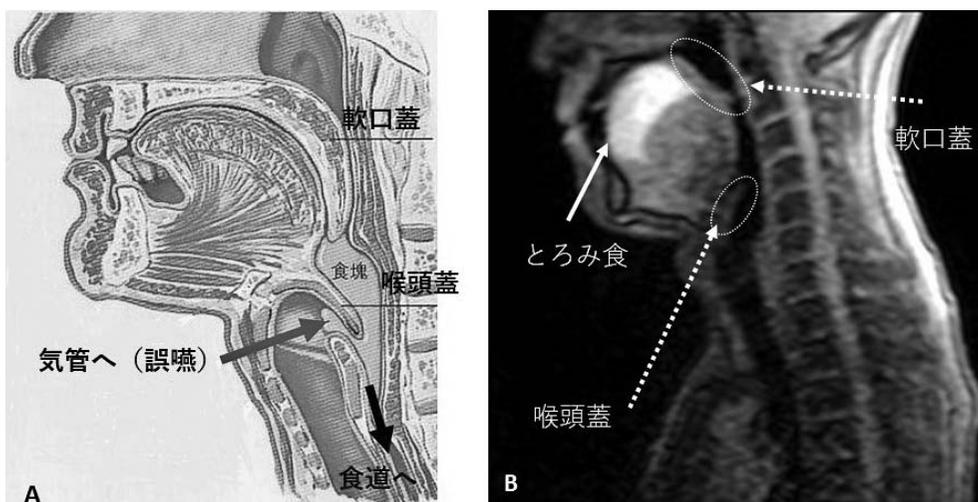


Figure 1

A: 矢状断面での図解、B: 実際の MRI 画像

〈MRI 動画記録法による in vivo でのとろみ食の流動評価〉

撮像パラメータは、以下の通りである。

TR: 36.80 ms, TE: 0.91 ms, FOV: 256 mm, slice thickness: 10 mm, pixel size: 1.0 mm × 1.0 mm (interpolation: on), tPAT (accel. factor 4) とした。(下記の QR コードから MRI 動画記録法で撮像した口腔咽頭領域でのとろみ食の流動の様子を閲覧可能。)



Figure 2

MRI 動画記録法を用いた口腔咽頭領域でのとろみ食の流動の様子 (QR コード)

MRI 動画記録法は、VF で用いられる嚥下造影剤などの影響や被曝の問題を考えずに、嚥下調整食やとろみ食そのものの口腔咽頭領域での流動特性を可視化し、経時的に評価できる有力な手法であることを確認した。今回、VF と同じ矢状断面による画像撮像を行ったが、VE のような斜断面での撮像も可能であることから、MRI 動画記録法を用いれば、VE と VF それぞれで得られる画像を非侵襲的かつ放射線被曝の問題もなく得ることが可能である。また、食そのものの流動評価のみならず、嚥下時の軟組織(軟口蓋や喉頭蓋)の動きとの相関性について、経時的に観測することができる。今後、嚥下調整食やとろみ食そのものの物性評価で得られた数値と、それらが実際に in vivo で口腔から食道へと移動する際にどのような相関性があるかなどについて、本手法を用いて明らかにしたい。

〈研究成果・内容の公表〉

- ①嚥下造影で使用される造影剤の濃度がとろみ食に及ぼす影響
- ②MRI 動画記録法による口腔咽頭領域でのとろみ食の流動評価
第 18 回日本栄養改善学会近畿支部学術総会、大阪、2020 年 3 月
- ③MRI 動画記録法を用いた口腔咽頭領域でのとろみ食の流動評価
アグリバイオ (2020 年臨時増刊号、咀嚼・嚥下の生理応答と食品開発)、北隆館

〈おわりに〉

本研究は 2019 年度から相愛大学研究助成(重点研究 B)を受けて開始されたが、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、2020 年 4 月(1 回目の緊急事態宣言)から、MRI 施設が使用できず、2021 年度をもって研究助成を終了した。本報告は、2020 年 4 月以前に撮像したデータをもとに、解析を行った研究成果である。現在、一部条件付きで MRI 撮像の許可が得たものの、感染予防の観点から、施設関係者以外の MRI の使用が制限され、研究目的とした実験が一部禁止されている状況である。新型コロナウイルス感染症が終息し、研究活動が自由にできるようになることを切に願う次第である。このような状況下ではあるが、本研究は引き続き、日本学術振興会科学研究費基盤研究(C)(22 K 02105)の助成を受けて、継続していく所存である。相愛大学研究助成(重点研究 B)により、基礎データを採得することができて、今回の科研費獲得につながったことをここに御報告するとともに、研究推進本部ならびに関係各位に心から感謝申し上げる。

相愛大学研究助成 重点研究 B

人間発達学部発達栄養学科 竹山育子

【研究課題】

血液透析患者の良好な予後と QOL 向上のための食事指導に関する研究

【研究期間】

2018 年～ 期間延長

【研究組織】

小野くに子

1. 研究目的

透析における食事指導の目的は、合併症の予防と生存率向上のためであるが、画一的な指導により食事指導そのものが QOL の低下を招いている。患者の生活、家族構成、身体状況を考慮した食事指導を実施することにより、患者に食事療法がスムーズに受け入れられ、良好な予後、QOL の向上が得られると考える。従来のカリウム制限、リン制限に重点をおいた調理方法の指導ではなく、市販の惣菜、レトルト食品をアレンジすることにより調理にかかる労作の軽減を図り、利用する食材の工夫により調理経験のない 1 人暮らし男性でも取り組めるような新たな食事療法が求められている。従来の茹でこぼし作業等を伴う調理は体力の低下した患者や高齢の患者および家族には負担になっている。この新たな食事療法は、以上の理由により、食事療法を諦めてしまっている患者やほとんど調理をしない単身患者が、食事療法に再度取り組むためのきっかけとなることが期待できる。本研究では維持血液透析患者に市販品を利用した食事指導を取り入れることにより、良好

な予後、QOL の向上を図ることを目的とした。

2. 研究目標の達成を目指して実施した主な研究と成果の概要

基礎データ収集のため対象患者の身体状況（身長、ドライウエイト、BMI、体脂肪率、透析間体重増加率）、原疾患、合併症、血液検査データ（透析前後）、GNRI、心胸比、透析期間、1 回の透析時間、透析経緯、血液浄化方法、食事指導歴、家族歴等の基礎データを把握するとともに食事摂取状況・栄養素等摂取量調査を実施し、対象患者の食事摂取量、困難であると思う食事療法の内容を調査。この結果を基に QOL 向上のための食事療法を模索しようとした。

同意が得られた患者の基礎データ収集と食事調査を開始した直後に COVID-19 が確認された。

血液透析は、血液浄化方法のひとつで、血液を一度体外に出し、血液中の老廃物や水分を除き、電解質や酸アルカリのバランスを正して再び体内に戻す方法である。そのため、徹底した感染対策が日常である。COVID-19 は基礎疾患のある者の重症化リスクが高いとされ、透析患者はインフルエンザ等の感染が生命を脅かすことから COVID-19 の感染対策を厳重に行うことは必須である。また、医療技術の進歩により、透析期間が延長されたことで、COVID-19 の重症リスクの高い高齢患者も多い。そのため、常勤の担当医師、看護師、臨床工学技師等以外は患者との接触を避け、感染リスクを抑えるため常勤スタッフ以外の透析クリニックへの立入りが制限された。本研究は個人情報を扱うため匿名化を行った後のみデータを院外に持ち出すことが倫理委員会で定められており、データの収集および解析を行うことが困難にな

った。患者からの聞き取り調査を WEB ですることも検討したが、設備が十分でないこと、患者自身が WEB に対しての経験がなくまた、個人情報情報を院外に持ち出すことにつながることで断念した。

COVID-19 はその後、感染者の増減を繰り返した。感染が落ち着いた時期にクリニックへの立入りが許可されたため、同意が得られていた対象患者を調べたが死亡が2名、自宅から介護施設へ入居した患者1名が確認された。また、入院中の患者もおり、対象者が減少したため新たな患者に同意を得ることも視野に入れ、研究方法の見直しをしたが研究の目的である QOL

向上を図るためには、患者のニーズを知る必要がある。患者との対面での面接が十分に行える目途が立たず、研究を断念するに至った。

ターミナル期にある患者が対象者であるため、今回の研究停止はやむを得なかったと考えるが、今後は死亡原因などをレトロスペクティブに研究を推進し、血液透析患者や透析に携るスタッフへ早期死亡に至らないための情報提供などできるところを模索しながら研究を進めたいと考える。また、COVID-19 感染が落ち着いたら、生命予後の良好維持につながる研究結果となるよう身体状況が良好な維持透析患者の経過観察を行いたい。

特別演奏会助成公演

学内オペラ公演

W. A. モーツァルト作曲「コジ・ファン・トゥッテ」全2幕

研究代表者：岡坊久美子（音楽学部教授）

共同研究者：泉 貴子（音楽学部教授）

1. 研究目的

①学内オペラ公演に於いて

W. A. モーツァルト作曲「コジ・ファン・トゥッテ」レチタティーヴォ付きアンサンブルオペラの演奏法について。また公演に対するアプローチについて

②オペラ演唱が及ぼす教育的効果について

③コロナ禍におけるオペラ公演が与える影響について

2. 日時

2022年12月26日（日）開演15時

3. 会場

相愛大学南港ホール

（大阪府大阪市住之江区南港中4丁目4番1）

4. 来場者数

170名

5. 出演者

指揮：奥村 哲也（教員）

演出：高岸 未朝（教員）

出演者：片桐 直樹（教員）

秋本 靖仁（教員）

萬田 一樹（助演）

藤本 伊吹

切通 佳奈

西村 未来

松尾 静

三木 彩乃

山崎 琴未（以上学部生・専攻科生）

相愛大学「コジ・ファン・トゥッテ」合唱団

相愛大学「コジ・ファン・トゥッテ」オーケストラ

チェンバロ：小椋 由美子（教員）

演出スタッフ：宮前 伶奈、百生 優衣子（以上卒業生）

音楽指導：泉 貴子、岡坊 久美子、片桐 直樹、萬田 一樹、馬場 清孝

コレペティトゥア：小椋 由美子、碓 理早

稽古ピアノ：玉城 葵

舞台監督：田中 敬子

舞台スタッフ：青木 一雄

演出スタッフ：志水 祐子

制作指導：志村 聖子

照明スタッフ：アートデザイン学科

教学 茜里

野口 美咲

萬野 美咲

吉井 翔人

小川 離久

中川 悠

堀田 貴史

和氣 彩乃

小道具協力：STA

字幕スタッフ：玉城葵

チラシデザイン：永井秀一朗（卒）

ライブラリアン：藤原 昌太郎

事務担当：畑田 真莉子

6. 公演について

モーツァルトの四大オペラ「フィガロの結婚」「魔笛」「ドン・ジョヴァンニ」「コジ・ファン・トゥッテ」の中で、各役の比重がほぼ均等であるのが、今回学内オペラ公演作品として取り上げた「コジ・ファン・トゥッテ」である。正式なタイトルは「Cosi fan tutte, (ossia La scuola degli amanti)」 「女はみなこんなもの」(または恋人たちの学校)であるが、一般的には「女はみなこうしたもの」という邦題で知られている。

「オペラブッフア」と呼ばれる喜劇的要素を含んだこのオペラは、アンサンブルの割合が他の作品より多く、どの役にも重要な役割を持たせた作品である。過去にも学内オペラ公演として取り上げられているが、今年度の学生の水準を考えるとこの作品を学修させるのが妥当と判断し、本年度の公演作品として取り上げた。「全役が主役」のアンサンブルオペラと言われるオペラである。

前年度には、E・フンパーディング作曲「ヘンゼルとグレーテル」を取り上げた。重厚なオーケストレーションの上に、声の響きを乗せて歌わねばならないという、難易度の高い後期ロマン派作品であった。振り返ると過去の学生オペラ公演には古典派からロマン派初期の作品を数多く取り上げていたため、学生たちは後期ロマン派作品に接する機会が少なかった。それらのなかでも出来る限りアンサンブル要素が強く、個々の楽器(声)が未完成であっても歌唱可能な作品を選択した。その結果、学生たちは一年間この作品に接し、舞台上で効果的なドイツ語の発音法や、言葉の持つリズムを有効的に利用した表現法を習得して公演を成功させた。この学修から得た演奏者としての自信は大きく、それが本年度のイタリアオペラ作品「コ

ジ・ファン・トゥッテ」でも同じく、イタリア語のディクッションを今までよりさらに一步踏み込んだ表現を学生が修得してくれるよう、我々教員は一丸となって指導した。

今年度はオペラ公演に先立ち、一部の役をオーディションで選出する事を試みた。オーディションにはオペラ演習Ⅲ・Ⅳ履修者、専攻科生、大学院生のほかに、ソリストとして舞台経験のない学生たちにもチャンスを与えた。普段は下級生として合唱に参加しながら上級生の演唱を聴講して学んでいくのだが、その後キャストの一員として選出された学生は、「オペラ歌手としての自覚と責任」を持ちながら、経験を積む機会を与えられた。

さて、今回再び古典派の作曲家モーツァルトの作品群に立ち返った理由のひとつとして、「レチタティーヴォ唱法の習得」がある。先に述べたように「コジ・ファン・トゥッテ」はオペラブッフアで、軽妙なレチタティーヴォの面白さが特徴のオペラである。レチタティーヴォとは「アリア(詠唱)やアンサンブルの間に『話し言葉』で語るように歌われる部分」を指すが、クラシック音楽を学修する学生たちにとって、基本は「楽譜に忠実に」であり、楽譜に書かれた音符やその長さを正しく演奏する事である。しかしレチタティーヴォでは、同じ音符でもテキストのシラブルやリズムによって長さを調整し、指示記号が無くともある程度フレキシブルに言葉の意味や感情により音の長さを変化させて歌わねばならない。しかしレチタティーヴォの学修経験が浅い学生にとって、それはかなり難しい。しかもイタリア語である。母語であれば言葉のアクセントがどこに置かれているかを容易く表現出来るが、イタリア語の語感が掴めていない学生にとってハードルが高い作業だと言える。「楽譜に書かれている事柄を

忠実に守る」を日ごろ学修している学生たちにとり、「ある程度」という曖昧さをどれだけ許容すべきか戸惑うからである。その上に喜劇を演じなければならない学生たちは、当初試行錯誤の連続であった。イタリア留学経験のある教員やコレペティトゥアの先生方の指導を受けるにつれて、ニュアンスを含んだ表現が上達し、本番では客席から笑いも起こせるような仕上がりととなった。

普段の個人授業で、まずは楽器（声）作りを学んでいる学生たちがレチタティーヴォ唱法を学ぶ機会は多くない。なぜならレチタティーヴォの練習には呼応する相手の間合いが必要となる場合が多い。そういった意味で、何度も繰り返し行われるオペラ演習授業の稽古は非常に重要である。キャッチボールに例えるならば、相手の投げた変化球を自分はどうのように受け、さらに投げ返すのかを考えながら歌う。相手に対して自分はどのように反応すべきかを学ぶ絶好の機会となり、本公演前には学生たちはレチタティーヴォ唱法に徐々に習得していく姿が見て取れた。

さらに普段のピアノ伴奏での練習から、オーケストラと共演が出来た事も大きな収穫であった。ピアノの音は楽器の持つ特性上、演奏後に減速するが、オーケストラの場合は音を保持して支えてくれる。その相違点を体感し、さらにその声をホールの最後列まで呼吸法を駆使して運ぶ。このような技術の実践も、条件が揃う機会がなければ経験できない。教室やレッスン室で響いている声が、果たしてホールでも同じく共鳴しているのか、そしてホールにおいていかに声を効果的に共鳴させる事が出来るか、さらには共鳴させるというのは一体どのような事を指すのかを実感できるチャンスである。これにより更に自己の楽器（声）と向き合い、高度な

歌唱技術を追求する事が可能になる。

歌唱面では学生たちは上述した数多くの学びを得たのだが、オペラは総合芸術であり歌唱のみならず演劇的な要求にも応えなければならない。相手のアプローチに対し演劇的にどう対応すべきか、或いは観客の反応に対して間合いをどう取るべきかなど、さまざまな適応力を必要とされる。稽古が佳境に入ると徐々にタイミングを掴めるようになった。この経験は舞台人としてのキャリアをさらに膨らませる礎となったに違いない。歌手同士だけではなく観客とのキャッチボール（間合い）は、本公演でのみ経験でき、その検証も観客の反応から生まれ出る。衣装にしても普段着用するそれとは違い大きく重量もあるので、着用した際の一挙手一投足は想像以上の制限がかかる、なども体験させる事が出来た。

これらの舞台経験は、将来的にいずれかの状況においても大きく心に残るであろう。

総合芸術であるオペラは、歌手やオーケストラのほかにも多くの方々のご尽力で公演が成立するが、その成功は表面的には見えない。舞台裏で支えて下さったスタッフの皆様にも、この場をお借りして心から御礼申し上げます。

コロナが蔓延した当初は、音楽界には言葉に表せぬ無力感が漂った。全てが初めての事ばかりで心配の種は尽きず、飛沫の飛び交うオペラに対する不安や恐怖もあり、残念ながら観客の足も遠のいた時期もあった。しかし次第に敵の正体が明らかになり、巷でも舞台公演を切望する声が高まり、本学でも徹底したコロナ対策を取りながら演奏会が再開された。今回舞台上では不織布マスク着用で学生たちには本公演に臨ませた。稽古中からマスク着用の歌唱に慣れていたとはいえ、さぞや大変であったに違いな

い。

三年目になるコロナ禍での本公演は、1席を空けた客席制限のなか170人のお客様がご来場くださった。このように相愛大学オペラ公演を待ち望んでくださっていた事が大変有難く、同時に次年度の作品も実り多い作品に仕上げなければならないと一層気が引き締まる思いであ

る。この先も恐らく形を変えたコロナ変異株が出現してくるのであろうが、万全な対策を取りながら引き続きオペラ公演を実施したいと考えている。

地域の活性化はもとより、関西の音楽大学を代表する水準の学内オペラ公演の為、教員一丸となって指導していきたい。



